

「まだ信じて頂けませんか？」



「私は本当に先生の事が好きですよ、一切恨んでません」

秘密の修学旅行

「勢いで興った生徒がドスケベなマゾ女だった」





「・・・」

「楽しみですね先生♪」

「・・・うん」

「うんうん」

『2人きりで旅行に行きましょう』
彼女に誘われてこの旅行は決まった
あんな事をした後なのに





「うぎっ……ぐえ……んっ……」

「好きだ……ずっとこうしたかった
ぜったい離すもんか……」



やってしまった・・・
人の居ない部屋で
勢いに身を任せて彼女を犯した

これで何もかも失い俺の人生は終わった
そう思っていた



「先生？まだ信じて頂けませんか？」

「いや、その・・・うん」

「私は本当に先生の事が好きですよ、一切恨んでません」



「むしろあんなに激しく愛されながら
耳元で好きだなんて言われたら誰でも落ちちやいますよ
思い出しただけで私・・・うふふ」

「そ、そっか」

「もちろん旅行中に先生がシたくなったら
いつでも私を使って下さい」

「ははは・・・」



何を考えているか分からない
でも奥に何か秘めている
そんな不思議な魅力に惹かれていたけど
こんな本性が隠れていたなんて

そのおかげで助かったわけだけど・・・でも・・・
どこまで本音なんだ？
何か狙いでもあるのか？

「あっ、つきましたね」

「わあ、すごい景色！来て良かったですね！」
(嬉しそうにしてると年相応にかわいいな)



「まだ時間がありますし、ちよつと見に行きませんか？」

「いいね行こうか」

「あっちなんてとても良いですよ
静かで木が生い茂ってて」



「道から見えにくくて
誰も人が居ないようです、うふふ」

・・・ゴクリ

「何もこんな所でしなくても」

「すみません、旅館まで持ちそうにありません……
電車に乗ってる時も我慢できなくて
先生でたくさん妄想していたんですよ？」

ほあ♡

ほあ♡

ズリ

ズリ

(俺よりよっぽど変態なんじゃないか?)



(おつきい・・・アゴ外れちやいそう・・・)

くく

く

ガッ
ッ
ッ
ッ



ゴッポ

ゴッポ

ん♡
ゴ

ん♡
ゴ





ゴッゴッゴッ

グッ

ゴッゴッゴッ

ぐんぐん♡





はぁー♡

はぁー♡

ベトベト...

「あはぁ...

顔も口の中も先生の臭いでいっぱい
濃くて男らしいですう...」

(今更だが人目に付きにくいとはいえ
誰か通ったりしないよなあ・・・)

ドキ

ドキ

(・・・まあこんな所で止められないしその時は仕方ない)





おっぱい

おっぱい

おまんこ...

お尻

おまんこ

「あつやばい、人がきた」
「えっ！」

♪

「。。。」



(せ、せんせい!?)

「ごめん、すぐ終わるから声我慢して……」



「はあ・・・はあ・・・行つたみたいだ」

「バレちゃつてたかもですね・・・興奮しちゃいました・・・」

(・・・俺もこの子と変わらないな)

ぽろぽろ...

うん...
うん...
うん...
うん...
うん...
うん...

「じゃあ旅館に向かおうか」

「はい、あつても、受付の人に臭いでエッチした事ばれちゃいませんかね？」

なんて、えへへ」

(怖い事を言う・・・)



荷物を部屋に置いた後
一緒に入りましようと言われ
各部屋備え付けの小さな温泉に入った



「大浴場もあるのに何でこっちが良いんだ？」
「そっちは男女別じゃないですか
先生と離れちゃうから嫌です、一緒に居たい
」。。。」



「あはっ、おちんちん硬くなってますよ
今ので喜んでくれたんですか？嬉しい」

「こんな感じでやるしらいでしょうか」

「ああ・・・すびくららよ・・・そのまま動かして」

「はい」

(先生すごく気持ちよさそう)

もっと気持ち良くしてあげたい)





一度や二度じゃ収まらず
何度も彼女の中に射精した

それでも全然収まらない





グニグニ

〜

〜

グニグニ

グニグニ...

〜

〜

ん〜ん





「はあ・・・はあ・・・ちよっとのぼせちゃったな、そろそろあがるっか」

「んうっ、は、はい・・・」

（あは・・・まだ出てる・・・全部私の中に吐き出す気なんだ♡）

グッ
グッ

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ

♡
♡

♡
♡

身体は熱くてだるいけど
まだ抱き足りない



上がって少し休んだ後

「あの……もうすぐ夕飯ですが……」

「ちょっとだけ、すぐ終わるから」

「先生さえ良ければ私は問題ないです、好きに使って下さいよ」







「はあ。。。はあ。。。ふう。。。
また温泉入らないといけませんね」

その後も夕飯までの間
何度も温泉と自室を行き来した



食事が下げられ旅館のスタッフが部屋を出た後
すぐに彼女を寝室に連れて行った



「あぁっ……先生の私の中の

一番奥まで入ってきてます……」



「私に遠慮しなくていいですからね
先生の好きなようにして頂いて大丈夫です」

「...」



「この格好はちよつと恥ずかしいですね」

「はっ
「。。。いいから尻向けて」







(ああ。。。がつちり掴んで性器押し付けて出されちゃってる。。。子宮の奥まで先生の濃厚ザーメンに犯されてる。。。)

「ふああ。。。気持ち良かったですか先生？
そうだったら私も嬉しいです♡」

「。。。」









「遠慮せず先生の好きなように・・・」
「あのさ、ずっと思ってたんだが俺の事ばかり言ってるのは何なの？」
「え・・・す、すみません・・・」

「いつも余裕ありますみたいな顔しやがってよ」
「ちがつ、私・・・そんなつもりじゃ・・・」

ん
いっ
いっ
いっ

「無様によがってるツラ
見せろって言ってるんだよ！」

「ひぎっ」



「そんな激しくされると・・・苦しい・・・」

「ずっとこうされたかったんだろ？」

「この旅行中ずっとよお、正直に言え」

「あっあっ・・・ぐうぐう・・・」

「・・・はい、そのとおりです！
大好きですう！
先生に乱暴されるのをずっと待ってました！」

「まだイクなよ？
今からお前の子宮に
大量の精子ぶちこんでやるから
中で出されたのを感じながらイケ」



「はい！先生の暴力精子がマソ豚な私の卵子を
めちやくちやにレイプして
孕まされてるの感じながらイクますうう！」

「出すぞっ！」

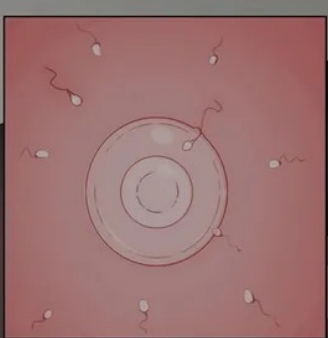
「はあ・・・はあ・・・ふええ・・・」
「はあ・・・はあ・・・」
「だ、だいじょうぶ？
もしかしてこういうのが
好きなのかと思って
試しにやってみただけど・・・」

「はひい・・・すごかったです・・・
えっちのあとやさしい先生もすきですう・・・」
「そ、そうか」
（やっぱよくわからんなこの子）



この後も彼女を抱き続けて
予定していた観光にも行かず
一度も部屋から出ないまま

2人の修学旅行は終わった



数ヶ月後

あの旅行で妊娠したようで
今は彼女と同棲をしている

「ただいま」

「おかえりなさいませ、今日もお疲れ様です」

「お腹でかくなってきたね」

（あと胸も・・・）



「……あれ？もしかしてそのエプロンの下って」

「はい着てません、お食事とお風呂の前に
求められたらすぐできるようにと思ひまして」

「そ、そっか……」

「あら？その気になってくれたんですね。嬉しい」

「こんなの見せられて我慢できないよ……
っていうかそんな事言っておいて
君だっけする気満々じゃないか」



「はい、今日も一日中あなたの事を考えてました・・・
お腹が大きくなってから遠慮してるようなので言い出せなかったのですが
もう我慢できません♡」



「今日もたくさん愛してくださいね♡」

おしまい









































































































